



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	自然栽培が織りなすケアの場：農福連携を行う生活介護・就労継続支援B型事業所のエスノグラフィー [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	福島, 令佳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第15066号
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85462
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Reika_Fukushima_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 福 島 令 佳

主査 教授 小 田 博 志
審査委員 副査 准教授 山 口 未 花 子
副査 准教授 樋 口 麻 里

学位論文題名

自然栽培が織りなすケアの場：
農福連携を行う生活介護・就労継続支援 B 型事業所のエスノグラフィー

・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文は文化人類学と福祉研究の学際領域である福祉人類学に位置づけられる。これは広い意味で福祉に関わる事象を、相対主義的な視座とフィールドワークを基本とするエスノグラフィーの方法論によって研究しようとする分野であり、日本ではまだ関連文献は少なく、本論文にはその先駆的な業績としての意義がある。著者はもともと社会福祉学を大学で専攻し、ソーシャルワーカーとして児童・家庭福祉の現場で数年間従事した後、専門学校で精神保健福祉の教員として勤務している。この内部者としての長年の経験から、現代日本の社会福祉の問題点に直面し、それを乗り越える手がかりを得るために、文化人類学のアプローチに関心を抱いて、本学文化人類学研究室に社会人入学した。研究生および博士課程の長期履修の期間を合わせるとおよそ 7 年におよぶ研究が本論文に結実している。著者が直面してきた社会福祉の問題とは、障害者を固定的に捉える規範主義的な価値観であり、その障害者をその規範の中で管理することを基調とするケアの実践である。これに対し、著者が予備調査で訪れた、自然栽培に基づく農福連携の事業所で経験したのは、そうした従来の障害者福祉とは異なったあり方を示すケアの現場であった。そこで著者は、それがいかなるケアであるのかを明らかにするために、同様の事業所で継続的にフィールドワークを実施して、考察を深めていった。その際に人類学と関連分野のケアに関する先行研究を検討することに加え、マルチスピーシーズ人類学といった人類学の先端的な潮流を意欲的に取り入れて援用している。その結果、障害者だけではなく、栽培植物とそれを含む生態系の多様性を尊重し、それに合わせて関わるといふ広い意味でのケアが、自然栽培に基づく農福連携の現場で実践されており、その中で支援者の側もまた規範主義的な役割意識から解放され、こうした多様なアクターたちが互いにケアしケアされるという関係性が実現していることが明らかになった。本論文で記録され、分析されたこうしたケアのあり方は、社会福祉分野に実践的、応用的ならびに理論的な示唆を与えるであろう。さらには福祉人類学の分野に対しても、人類中心主義的な傾向を越えてマルチスピーシーズ人類学との対話を促し、ケアの概念を問い直していく研究としてこれから参照されるべき意義を有していると評価できる。

・学位授与に関する委員会の所見

以上のような、学術的かつ応用的な意義が認められる本論文であるが、ここで特記したいのは、著者が社会人入学という制度を有効に活用し、社会人として勤務する現場の問いを解くために、大学院での研究を行うという、職場と研究との相乗的な関係の中で本論文を執筆したことである。著者はフルタイムで働きながら、休暇を利用してフィールドワークに出かけ、文化人類学の知識をも身に付けながら粘り強く本論文を完成させた。その歩みは大学院における研究の多様な可能性を開き、これからの社会人院生のロールモデルともなるはずである。著者は学会発表と論文投稿にも積極的に取り組み、『北海道社会福祉研究』、『北海道民族学』、『北方人文研究』に本論文に関する査読付き論文が掲載されている他、学会“Anthropology of Japan in Japan”の 2021 年度年次大会で本論文第 5 部の内容を発表している。

審査委員からは口頭試問の場で、先行研究を羅列的に紹介する傾向や、「自然栽培の世界観」といった用語法とその位置付けなどの問題が指摘された。これに対して著者は、こうした問題を理解し、それらを踏まえて今後の研究に取り組む旨の回答を行った。これらの問題は、著者がフィールドワークで把握した新しいケアのあり方とその分析という本論文のオリジナルな核心を損なうものではない。このことから審査委員会では福島令佳氏に博士（文学）を授与することが妥当であるとの結論に達した。